この後、按腹のやり方を具体的に七法にわけて述べている。

このようにわが国の医学医療の底辺を流れていた按腹術を『按腹図解』として世に出したのが大田晋斉で、次のように述べている。

「人生養生の第一義は按腹導引にしくものなし、たとえ無病たりとも平生導引按腹して元気を鼓舞し気血を循環し飲食を消化し二便を快通し、無病壮健にして天寿を全うするに過るはなし」

このような按腹が明治以後まで命脈を保ったことは、明治四十四年に制定された『按摩術営業取締規則』に次のような附則があることでもわかる。

「本令発布ノ際現ニ按摩術（按腹、揉療治ノ類ヲ含ム）又ハマッサージ術営業ヲ為ス者本令施行後三箇月以内ニ願出ヅルトキハ……」

（七沢リハビリテーション病院脳血管センター）

一九世紀末から二〇世紀初頭の中国における女子医学教育について

三崎裕子

近代中国における女子医学教育は、一八七九年に広東（博済）医学校が女子の入学を許可したことをその嚆矢とする。これは、イギリスのロンドン女医学校の開設に遅れること五年、またスイスには三年の遅れをとったが、アジアでは、最も早いものであった。

しかし広東医学校の例は当時の中国の女子医学教育のなかではきわめて特殊であり、大部分は、教会から派遣された宣教師女医が、その診療活動の合間に数人の女子学生を教えたことに始まる。宣教師女医による女子医学教育としては、まず天津での監理会のものがあげられるが、福州の美以美会、また上海、衛県などでも行われた。そしてこれに続いて、教会が経営する小規模な女医学校が相次いで設

立された。蘇州医科大学の前身となった学校、広東女子医学堂、北京共和医科大学女子部などである。また、上海にも女子学生を対象とした医学校が設立されている。このようなキリスト教系の医学校は、当然のことながら、布教活動の一環として設立されたものであるが、当時の女子医学教育状況を鑑みると、その意義は非常に大きなものであったといえる。

教会系の女子医学教育には若干遅れるが、一九〇〇年初頭から、中国人自身による女子医学教育もその萌芽をみせた。宗孟女学堂に医学科が設立されたり、著名な女医、張竹君が女子中西医学院を設立したのもこの時期である。この他にもいくつかの中国人による女子医学教育機関の設立がみられ、一九〇〇年初頭は中国における女子医学教育のエポックであった。

さらに、いくつかの男女共習の医学校も存在した。これらの医学校は限られた地方で、しかも短期間に合併、吸収などを繰り返したが、五四運動期の高等教育機関の男女共学にも影響を与えたという意味でも、その存在は非常に重要であった。

以上のように日中戦争以前の中国においては、女子医学教育が非常に注目すべき展開を示していた。このような女子医学教育は、日中戦争によって断絶されるのであるが、近代的な女子医学教育の受容という側面で日本のそれと比較すると、日中の初期の女子医学教育の特徴もまた明らかになることと思われる。

（東京女子大学歴史学研究室）